

子どもたちの音に対する感じ方と表現についての一考察

—楽器あそびの授業実践を通して—

渋谷 るり子

はじめに

今年度、小学校の学校公開における音楽の授業（1、2年生対象）を外部派遣講師として実施する機会が得られた。普段は幼稚園教諭免許取得のための教科に関する科目、保育士養成のための保育の表現技術に関する科目である「音楽」を担当している。幼稚園教員養成、保育士養成の授業をする中で、幼稚園から小学校への音楽の内容や表現について、指導内容がどのように移行していくべきか興味を持っていた。小学校学習指導要領の音楽の指導計画の作成と内容の取扱いに「第1学年においては、幼稚園教育における表現に関する内容などとの関連を考慮すること」（文部科学省 2008b）とある事から、今回の小学校での学校公開での授業は実際の子どもたちの反応を確認する機会ともなった。幼稚園や保育所での3歳ごろから小学校2年生までの5年間、音楽表現や情操に関する内容は、就学前と就学後によって区切られるものではなく、まさに「関連を考慮」すべきものとしての考え方は言葉として理解しているつもりであった。今回の実践で、実際の子どもたちが、どのように「音」や「音楽」を受け止め表現してくれるのか、保育者養成に携わる者として非常に興味深かった。本稿では、授業を振り返り、授業を通して気が付いた事等を考察し、今後の活動への手がかりをみつけるためにまとめてみることにした。

1. 学校公開の外部派遣講師とは

墨田区では平成21年度より教育委員会内に「学校支援ネットワーク本部事務局」が発足。学校支援ネットワークとしてさまざまな団体や企業、講師と授業内容が登録されている。墨田区内の公立幼稚園、小学校、中学校からの派遣要請により講師を紹介、授業実施へコーディネートしている部署である。支援団体や支援者は学校支援ボランティアとして位置づけられている。授業プログラム数は、平成25年度においては200以上も準備され、学校での教科内容をはじめ、道徳、キャリア、伝統文化、ものづくりなど多岐にわたる。支援者、支援団体は、自分が実施できるプログラムの内容をネットワークニュースとしてA4サイズ1ページにまとめ、事務局に提出する事で登録となる（図1は私のネットワークニュースである）。200以上のプログラムから学校側が選ぶ仕組みになっている。

私はこの墨田区の事業支援者の1人として平成25年度より支援プログラムを登録、授業を実施することとなった。詳細な授業内容については授業依頼をする小学校等の担当教諭との事前打ち合わせにより、希望されるテーマにて授業を展開していく。



図 1. 平成 25 年度ネットワークニュース

2. 授業実施の方法と対象

各学校、園から依頼される授業のねらいについては、共通して「音楽の楽しさ」や「皆で一緒にすることの楽しさ」、「音楽に親しみをもつ」といった体験ができるようなテーマ（ねらい）との事だった。実際の小学校の先生方からお話を伺うと、コミュニケーションを取りながら、クラスみんなで楽しむことやみんなで何かをする楽しさ、音楽に触れる事がとても楽しい事であるという事を是非とも体験させたいというお気持ちが伝わってきた。各園、学校からの希望テーマを受け、A：楽器あそび、B：音楽に親しむ、C：リズムあそびという 3 つの授業内容で実施したのだが、この考察では A の打楽器あそびの授業について取り上げることとする。対象の年齢を考え、ゲームの難易度や説明の仕方を少し変えて実施したが、扱うテーマと授業の中で体験するあそびなどの内容に大きな差が出ないようにした。授業の時間は小学校の授業時間と合わせて、1 つのプログラムが 45 分程度の設定になっている。

打楽器あそび実施人数・・・1 回目 幼稚園年長 2 クラス合同（68 名）
 2 回目 幼稚園年長 2 クラス合同（70 名）
 3 回目 小学校 1 年生 2 クラス合同及びさくら学級（70 名）
 4 回目 小学校 2 年生（30 名）
 5 回目 小学校 1 年生 2 クラス合同（38 名）《計 5 回実施》

3. 活動の内容

打楽器に触れながら、《みんなで音を出したり合わせる楽しさ》を味わう
 自分の気持ちを持っている打楽器で表現する
 音や音色を楽しむ（味わう）

- ① アイスブレイキング（導入）として【しあわせなら手をたたこう】

② 打楽器とおともだち【子どもたち一人ひとつの打楽器を持つ】

準備した打楽器：カスタネット、鈴、タンブリン、ギロ、マラカス、クラベス
ウッドブロック、カウベル、カエルギロ、カバサ
ハンドドラム、ボンゴ、

③ 指揮者ゲーム

④ 気持ちを音で表現しよう

⑤ 自由なリズムで合奏しよう【おもちゃのチャチャチャ】

または、宝探しゲーム

⑥ ピアノ独奏（ショパン作曲 仔犬のワルツ）

体育館で実施。子どもたち全員で大きな一つの輪になり、全員が内側を向き皆の表情を見られるような形で進めた。輪の中心にはすでに楽器がおいてあるのだが、大きな布をかけ、楽器が見えないようにしておいた。少人数の小学校では、保護者も輪の中に子どもと一緒に加わるようにし、授業を始めた。

打楽器を選ぶ時に上にかけた布を外し、中心にある楽器類から自分の担当したい楽器を順番に手に取ってもらった。楽器を選ぶ方法は、音楽に合わせ楽器のまわりを時計回りに手拍子をしながら周り、音楽が止まったところで、ある条件に合った子どもだけ楽器を選びに行く事ができるゲーム形式をとった。楽器を手にとる時には、試しに音を鳴らす事はせずに選び、楽器の数は子どもたちの人数より少し多く準備した。保護者は手拍子での参加をお願いした。

撥（ビーター）が必要な楽器もあるが、どの楽器にどの撥（ビーター）を使うかは子どもたちが好きな音色になるように任せ、必要な時だけ助言した。

指揮者ゲーム（図 2.）は、音を出すサイン（パー）と音を鳴らさない（音を止める）サイン（グー）のみから始め、音の強弱（上下で表現）までできるようにした。ルールがわかり音で表現できるようになった後、指揮者を交代した。指揮者は授業を見に来ていた保護者や担任の先生、クラスの子どもたちなどさまざまな人に体験してもらった。一段落した後、楽器の名前やどんな音がする楽器であるかも補足。子どもたちの好きな音を思うままに出してもらいたいという観点から、小学校ではあえて演奏方法は始めに説明せず、持っている子どもたちに音を出してもらい、補足程度にした。

指揮者ゲームの流れの後、指揮のサインルールはそのままに、気持ちを音に表して遊ぶ事に移行。【楽しいかんじで楽しい音】【悲しい音】【怒った音】【眠そうな音】など、持っている楽器の音だけで表現させた。お題は教員が提示した。

最後の合奏では、伴奏として「おもちゃのチャチャチャ」を弾いたが、どのようなリズムで演奏するか、自分の出したい音をどのように表現したいのか、各自思い思いのリズムで合奏した。

宝探しゲームは、冒険家（宝を探す人）は外で待ち、残った全員は楽器を持って分散して座る。残った全員は宝の場所を知っていて、探しに来た冒険家に音の強弱で宝の場所を教えるものである。宝に冒険家が近づくと大きな音へ、遠いと小さな音という形で音の強弱をたよりに、どこに宝があるのかを見つけるゲームである。

最後のピアノ独奏は学校の先生方からの依頼で、是非ピアノの演奏をとの事で披露した。

4. 子どもたちの様子

楽器であそぶ事を子どもたちにあらかじめ伝えてあるため、教室（体育館）に入るなり布をかけられた楽器に興味を持ったようであった。「今日は何をするの？」「中に何が入っているの？」「楽器は何？」小学生は自分から私に聞いてくる事もあった。小学生も幼稚園児も楽器で遊ぶ事を、とても楽しみにしてくれている様子であった。小学校では、楽器にかけてあった布を外すと、自分の知っている楽器の名前を次々に言う子ども、隣の子と何にしようか相談している子どもが多く、にぎやかになった。カエルの形をしたギロが、大きさも色も存在感があり、子どもたちの注目の的になっていた。その場を動かないように指示を出していたので、早く楽器を手にとりたくて騒ぐ子、「ギロをやりたい、ギロをやりたい」と楽器名を挙げ自分の意思をはっきり言葉に出す子どもが見られた。幼稚園では、「わあーっ」という歓声はあったものの、騒がしいおしゃべりをする姿は少なく、こちらの次の指示をじっと待っている様子であった。それは園児2回とも同じであった。

楽器を手にする際に、小学校では目的の楽器に走ってくる子、友達と取り合いになり譲らない子、いろいろな種類の楽器が残っていても、手にとるまでの時間は短く、すぐに手にとっていった。先にギロ、ウッドブロック、ハンドドラム、マラカス、カウベルが無くなり、特にギロとマラカスは人気が高く、取り合いになる事が多かった。マラカスは2つ対で両手に持てるように置いておいたのだが、あまりにも人気が高く取り合いになってしまうので、1つにするように話し、双方しぶしぶ納得していた。最後まで残る楽器は決まってカスタネット、タンブリン、鈴であった。楽器を選ぶ子どもたちの表情は真剣そのもので、絶対にこの楽器がやりたいという強い眼差しで楽器をみている子どもが多かった。

最後の方になってしまい、カスタネットやタンブリンしか残っていない時には、まだ他にないのか、隈なく楽器を探している様子だった。「しょうがない、カスタネットでいいや」と言い残し、手にとる子どももいた。やりたい楽器を持てなかったとしても、楽器で遊ぶ事は楽しんでいた。

幼稚園では、楽器を目の前にして自分が選ぶ順番になっても、実際に手にとるまで全体的に時間がかかっていた。目の前の楽器を一通り全部眺めて、なかなか手にする事ができない子が数人いた。「どの楽器で遊んでみたいかな」と声をかけるが、「うーん」と返事をし、悩んでいた。その傾向は楽器が少なくなるにつれ見られた。幼稚園で実施する時には、木製楽器と膜鳴楽器中心にし、トライアングルだけ置かなかった。すぐに選ばれ、なくなってしまった楽器はカスタネット、鈴、タンブリン、に次いでウッドブロックだった。恥ずかしそうに選ぶ子、一通り楽器を見てタンブリンを選ぶ子、選び方はとても落ち着いている様子で、取り合いはなかった。ある特定の楽器に走って来る事も見られなかった。最後まで残ってしまった楽器は、カエルギロ、ボンゴ、カバサで、カエルギロは最後まで残っていた。カスタネットもタンブリンもなくなってしまった時、残った楽器の演奏の仕方を助言すると、手に取り戻っていった。

指揮者ゲームでは、なかなか指揮を見られずに、音を出す事に夢中になっている様子が見られたが、次第に全員で合わせていくようになっていった。これは小学校も幼稚園でも同じであった。指揮者を交代し、担任の先生に変わった時の子どもたちの表情は、とても

生き生きとしていた。それは保護者に交代しても同じであり、子どもたちはとても協力的な様子だった。強弱を表現する時に、小学校では、出せる限りの力で楽器を叩いて、大きな音を出そうとしていた。指揮に気が付かない子どもに対して、そばにいる子どもたちが「今は出さないよ」とか、「グーになってる」などと声をかけていた。中にはとても集中力があり、じっと指揮者を見ている子もいる。



図 2. 指揮者ゲームの様子

何回か続けていき、ぴったりと全員が合い、音が止まった時は、指揮者はもちろん子どもたちも満足げな表情を見せた。しかし、音を出す事に夢中になってしまう事が多く、手に持っている楽器しか見ていない子もいる。

感情などを音で表現する時には、【楽しい感じ】は音もにぎやか、表情も豊かであった。【悲しい感じ】はとても音は小さくなって、時には聞こえないくらいの音になる事もあった。一人ひとりのリズムは確認できないが、私には音と音の間隔がゆっくり聞こえた。【怒った感じ】は、感情をそのまま楽器にぶつけている子もおり、とても大きな音で、音の出し方もとても雑であった。悲しい感じから一変、早く叩く様子も見られた。【眠そうな感じ】では、本当に寝ているようにする子がいておもしろかった。音の間隔はゆっくり聞こえ、音は小さく感じた。

自分が担当している楽器の、“いちばんきれいだと思う音”、“自分が一番好きだと思う音”で鳴らしてもらおうと、乱暴にたたく子はいなかった。耳に楽器を近づけて鳴らす子どももいた。撥を使用して音を出す楽器では、周囲の子どもが持っている別の撥で試した子がいた。木でできたカエルのギロの足が折れてしまったと、暗い表情で謝りにきた。理由をきくと、どんな音がするか試してみたくなり、ギロをクラブでたたいてみたそうだ。クラブは固かったため、カエルの足が折れてしまったそうだ。どんな音がしたかを尋ねると、（壊れてしまい）わからないという返事だった。また、マラカスを割ってしまったという子がいた。この子は、マラカス同士で叩いてみたとのことだった。楽器の扱いについては是非があり、丁寧に扱う事を伝える事も大切であると思うがここでは触れない事とする。

子どもたちの感想文からは「みんなでがっきをならせたのしかった」「しらないがっきをおしえてもらえてうれしい」「カエルのがっきがおもしろいおとだった」「はじめてみたがっきがすごいとおもった」「しきにあわせてみんなでおとがだせたのがおもしろかった」「がっきはなんしゅるいくらいあるのですか」「すずをつかっていいきもちになった」等の感想があった。（下記は子どもたちの感想より）



図 3. 小学校 1 年生による授業後の感想

また、A 小学校 1 年生 2 クラスで実施した楽器あそびの感想の内容を集計したものが下記である。楽器あそびが楽しい、授業がおもしろかったという感想は、「楽器に触れられたこと」というカテゴリーに入れ、ゲームや楽器について具体的な内容に触れているものはそれぞれの項目を立てた。

ある小学校での感想より

内容	人数
楽器に触れられたこと	26
音の宝探しゲーム	19
みんなで鳴らせた（演奏できた）こと	5
知らない楽器に出会ったこと	4
ピアノ演奏が聴けたこと	19
カエルの楽器の音がおもしろいなど、楽器に興味	5
音についての感想（きれい、こんな音がした）	7
その他の気づき	1

表 1. A 小学校 1 年生 2 クラスの感想の集計

これを見ると、楽器に触れて音を出して遊んだ事が楽しかったと印象に残っており、次いで、楽器を使ったゲームが楽しかったという事がわかる。さらに楽器の事に触れながら音について気が付いた事を挙げている子どもたちが全体の 1 割いた。楽器に触れる事は、子どもたちにとって、楽しみの一つである事がわかった。それを裏づける感想として、「楽器を貸してくれてありがとう」と書いている子どもが数人いた。「貸してくれてありがとう」という表現が私にはとても意外だった。またピアノの独奏を目の前で聴く経験も新鮮で印象が強かった事がわかった。

5. まとめ

今回の実践を通して、幼稚園現場の先生方が特に驚いていたのは、子どもたちの楽器の選び方だったようだ。カスタネット、タンブリン、鈴、トライアングルは、比較的幼稚園

や保育園での生活の中で、何がしかの機会に触れている事が多いとされる楽器であると思う。それを踏まえてあらかじめ準備しておく楽器も、その4つ以外の楽器を多く集めるようにした。例えばウッドブロックは、箱型のものや、左右型など、楽器の種類は同じでも形の違う楽器、形は一緒でも大きさの違う楽器、プラスチックと木など素材が違うものなど様々そろえた。なぜなら音に興味を持ち、手に持って叩いて音が出せる打楽器にも、沢山の種類の楽器があり、やってみる楽しさを味わってほしかったからである。楽器の形を見てこれはどんな音がするのかと視覚から興味を持ち、楽器に対する期待感と、実際に手に取り音を出す事で更なる発見があったら良いと考えたからだ。特に今まで見たこともない楽器に触れる事も、幼児や子どもにとって新たな刺激になり、新たなものへの興味関心を引き出すようなきっかけになれば良いと考え実施した。

小学校では、ギロやウッドブロックなど少し珍しい楽器の人気が高かった事は先に述べた。面白そうだ、やってみようという積極性が行動に直接見られたのが小学校であった。逆に幼稚園年長はカスタネット等の4種類の楽器から先になくなり、体験してもらいたいと考えた楽器が、最後まで残ってしまった。小学生が一番人気だったカエルギロは、幼稚園では結局最後まで残ってしまった。存在感のあるカエルギロが、子どもたちの目に触れていないはずはないのに、手に取らないのは意外であり、幼稚園の先生方は「子どもが真っ先に選ぶと思っていたので意外でした」、「いつも園で親しんでいるカスタネットが一番人気で、やったらきっと面白と思うのに手に取らないですね。勉強になりました」と感想を述べていた。その傾向は園児4クラスとも同じだった。

ハンドドラムは、抵抗なく手に取っていた。ウッドブロックやカウベルも同様だった。園の先生は、「ウッドブロックは、普段の音楽会等でもやった経験があります。だから選んでくれたのでしょうか。ギロは今まで使用した事が無かったです」ともお話下さった。これらを踏まえると、似ている楽器で経験した事があり、演奏や扱いのイメージが持てた楽器は、積極的に選んでおり、やった事（見たこと）のない楽器は、なかなか選ぶという行動には結びつかないと考えられる。小学生は幼稚園年長児と1年しか違わないが、この1年の経験が大きいと考える。見たことや触れた事がある楽器の種類も増えるだけでなく、好奇心も生活の広がりも見られ、それが自分のやりたい楽器を選ぶという主体的な行動にも表れていたと考えられる。小学生は面白そうだからやってみよう、見たことのない楽器だからやってみたい、一つしかない楽器だなどと自分で判断し、主体的な行動に出たのだと思う。その事は、不幸にも楽器を壊してしまうという行為からも見てとれる。やみくもに楽器を扱ったのではなく、「これで叩いてみたら壊れてしまった」という子どもの言葉が、楽器や音への好奇心と主体的な行動を裏付けているのではないか。「どんな音がするか」「どの音が好きか」を考え気づいてもらいたかった授業なので、その子なりに音へのこだわり、追求があった事はとても嬉しかったし、発見であった。遊びのルール上の「やってはいけない事」もわかった上で、自分で判断し行動した結果なのだ。

しかし園児は、触ったことのない（説明を受けた事のない）楽器が目の前にある場合、すぐに行動に結びつかず躊躇し、慎重になってしまっていた。結局、周囲のお友達と一緒に楽器を持つという行動が示しているとおり、楽器を選ぶという行為は、園児一人ひとりが主体的に取り組んでいる行動ではない場合が多いという事がわかった。もちろん全員が全員ではない。果敢にチャレンジする園児ももちろんいた。でも「この楽器とこの撥でよ

いか」の確認など、少しでも不安がある場合大人への確認がある事でも説明がつく。これは、まだまだ大人への依存度、特に園の生活の中では担任の先生への依存度が高く、好奇心があっても、周囲の大人の仲立ちが非常に重要なのだと実感した。楽器に興味はあるが、ビーターが必要な楽器かどうか分からない場合、手にとる事は躊躇していたが、楽器とビーターがセットである事を告げると、安心した表情になったことがそうだ。

園児たちが、楽器に興味関心を抱く環境づくりは非常に重要であり、幼児がどうしても分からない時の援助と、子どもたちが自分なりに考えてみようとする気持ちとのバランスがとても大切であると改めて感じた。そして、聞きたいけれどどう言葉で相手に表現したらよいか、うまく思いを伝えられない子どもたちの気持ちを、大人が受け止めてあげる重要性、察してあげる事の必要性があるという事も改めて感じ反省した。また、いろいろな楽器に触れる機会も大切である事がわかった。

今回はどのクラスも私がかかわったのは1回の遊びで、別の日の子どもたちの様子を追っていないので、あくまでもその時間内での事である。園児たちは、ある一定の広がりの中で、それらの楽器を楽しむ行動を続け、満足感を得ているようだ。言い換えれば教師が準備した環境の中で楽器あそびの表現をじっくり楽しんでいたといえる。しかし小学校では、教師の準備した環境にとどまらず、自分たちでどんどん新しい表現にチャレンジし、表現やあそびの発展が速い事がわかった。

園児も小学生も、(これは本校の学生にも当てはまるが) 楽器で遊び音を出す事は、好きである。楽器を持たせてもらった時の子どもたちの表情はとてもいい。そして音を出すことを体いっぱい楽しんでた。心で感じ、その表現を実に素直にやっていた。音楽や音に触れる楽しさは皆共通して感じ、楽器を演奏する事も楽しいと思っている事がわかる。この事は「音」への出会い方、「楽器」への出会い方は良かったと言え、今後も大切にしていってほしいと願う。

子どもたちは音に対して、非常に細やかなとらえ方をしてくれている事にもうれしさを感じた。そしてその感じ方と表現は、年齢が上がると、より具体的になって表れていた。感想文にもあったが、演奏の仕方(叩き方)によって音の違いを感じたり楽器の音の心地よさを感じたりしていた。自分が好きな音、こんな感じの音、という表現の仕方に関する声かけを心がけ、その楽器の演奏の仕方に関しては説明しなかったにもかかわらず、音の違いに気が付いてくれた事がとてもうれしかった。しかし結果としては、もっとじっくりかかわる時間を設け、丁寧に進めていくべきであったと思う。あまりにも盛りだくさん過ぎてしまったプログラムだったのだ。

子ども一人ひとりが今まで経験した事と、心で感じる事は大きく係わりがあると思う。そして、感じた事を言葉や行動に必ず表現しているとは限らない。であれば、今回のように同じようなプログラムを、違う学年に実施する事も大きな意義があるといえよう。繰り返し体験する事で、少しずつ主体的に活動できるようになり、また改めて体験する事で、新たな気づきがあると思うからだ。それは本校の学生のような大人に対しても強く思う。保護者や本校の大人の学生たちは、珍しい楽器や見たことのない楽器にたいして興味を持ってくれる。カエルギロやカバサがその代表だ。おそらく高等学校の選択音楽の授業でもなかなか扱う機会のない楽器であるからだろうか。そんな楽器に出会った時、大人たちも小学生のように楽器を触り、「おもしろい」と言っていた。だが、楽器を触って遊んでいる

中で、演奏の仕方による音の違いはなかなか口にしてくれない。叩き方によって音が変わる事ぐらい、当たり前である事を大人になるまでの今までの経験で知っているからだとは思っている。言い換えれば、その経験が表現の幅を狭めているとも考えられる。カエルギロはカエルの背中のギザギザした部分をこすれば音が鳴るし、そう演奏（音を出す）すべきだと想像も容易につく。そんな学生には、別の演奏の仕方（叩き方）を伝えるようにしている。こする向きを逆にし、またピーターの持つ向きも変え、ギザギザしていないところをいろいろ叩くのだ。そうすると、始めて音の違いに気が付いてくれる事が多い。決まって「本当だ、おもしろい」と述べ、その後は学生本人がいろいろと試すことを始める。小学生と一緒に活動になるのである。

幼稚園児たちに、早く小学生のように主体的に行動してほしいとは考えていない。その子がその時の音に対して感じている事を大切にしたいし、少しずつ育んでいきたいと思う。今まで間接的に見たこと経験した事を急に超えて表現する事はできないので、ゆっくりゆっくり育んでいくべきだと思う。そして本校の学生には、幼稚園児や小学生の子どもたちの感じた事に寄り添えるような保育者になってほしい。時に、私が出会った小学生のように、音に対して心から楽しんで表現できたら素敵だろう。小学校の数人の子どもたちがピアノの音がきれいだと感想を書いてくれた。一人ひとりが感じた「きれい」は、同じ言葉でも違った「きれい」であると信じている。どう「きれい」なのかを表現せずとも、一人ひとりの「きれい」が子どもたちの心にあればいいのかと改めて今回の活動を通して思った。もちろん「きれい」でなくてもいい。何かを心で感じている事が大切なのだ。幼稚園教育要領解説には「感じること、考えること、イメージを広げることなどの経験を重ね、感性と表現する力を養い、創造性を豊かにしていく」（文部科学省 2008a, 158）とある。楽器を扱うと、どうしても“演奏すること”にポイントがおかれ、音に対してどのように感じるか、イメージするかという事がないがしろにされているように思えてならない。幼稚園や学校現場で音楽に触れる機会はたくさんある。学校では特に何かに対して「できる」という目標が立てられてしまう。演奏できる、歌うことができるといった具合である。小学校に入ってすぐである。本校の学生の音楽の授業を担当すると、ピアノを演奏することができる、歌を歌うことができるという事をどうしても避けては通れない。しかし、根本である感じる心を今一度育む必要があると改めて考える。そして子どもたちは些細な音に対しても、心を動かし感じている事を今一度心にとめて、今後の活動につなげていきたいと考える。

引用文献

文部科学省 2008a 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館。

—— 2008b 『小学校学習指導要領』

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/on.htm (accessed June 3, 2013).